



kaminorippo.org

付録7a: 処女、やもめ、離縁された女: 神が受け入れる結びつき

このページは、神が受け入れる結びつきに関する連載の一部で、次の順序に従っています:

1. [付録7a: 処女、やもめ、離縁された女: 神が受け入れる結びつき](#) (現在のページ)
2. [付録7b: 離縁状 — 真実と神話](#)
3. [付録7c: マルコ 10:11-12 と姦淫における偽りの平等](#)
4. [付録7d: 質問と回答 — 処女、やもめ、離縁された女](#)

創造における結婚の起源

最初の結婚は、創造主が最初の人間である男[אָדָם (zākhār)]の伴侶となる女[חַוָּה (nəqēvāh)]をお造りになった直後に起こった、というのは広く知られています。雄と雌——これが創造主ご自身が動物と人間の双方に対して用いられた用語です(創世記 1:27)。創世記の記述によれば、神のかたちと似姿に造られたこの男は、地上のほかの被造物の雌の中に自分に似た者を見いだせず、惹かれる者もいなかったため、伴侶を望みました。原語の表現は[עֵזֶר כְּנֶגְדּוֹ (‘ēzer kenegdô)]で、「ふさわしい助け手」を意味します。主はアダムの必要をご覧になり、彼の体の女性形である女を彼のために造ることをお決めになりました。「人がひとりであるのは良くない。彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」(創世記 2:18)。こうしてエバはアダムの体から造られました。

聖書による最初の結びつき

このようにして魂の最初の結びつきが起こりました——式も、誓いも、証人も、宴も、登録も、司式者もありません。神はただ女を男に与えられ、彼はこう応じました。「これこそ、私の骨からの骨、私の肉からの肉。彼女は『女』と呼ばれる。男から取られたのだから」(創世記 2:23)。そのすぐ後、アダムがエバを知り[יָדָע (yāda‘) — 知る、性的関係を持つ]、彼女が身ごもったと記されています。同じ表現(知る、そして妊娠に結びつく)は、のちにカインとその妻の結びつきにも用いられます(創世記 4:17)。聖書に記録された結びつきはすべ

て、男が処女(またはやもめ)を自分のものとして迎え、彼女と関係を持つという、きわめて単純なものです——多くの場合、「知る」または「彼女のところへ入る」という表現が用いられ、それによって結びつきが実際に成立したことが確認されます。宗教的であれ民事的であれ、式があったと述べる記述はひとつもありません。

神の目には、いつ結びつきが成立するのか？

中心となる問いはこうです：神はいつ、結婚が成立したと見なされるのでしょうか。可能性は三つ——ひとつは聖書的で真実、残り二つは人間が作り出した偽りです。

1. 聖書的な選択肢

神は、処女の女が男と最初に合意のもとで関係を持った瞬間に、男と女は結婚したと見なされます。すでにほかの男を持った女の場合、前の男が死んでいるときにのみ結びつきは成立します。

2. 偽りの相対主義的选择肢

神は、カップルがそう決めたときに結びつきが起こると見なされる、という考えです。言い換えれば、男も女も望むだけの性的関係を持てるが、同居を始めるなど、関係が「真剣になった」と彼らが決めた日にはじめて、神はふたりを一体と見なす、というものです。この場合、男の魂が女の魂に結び合わされる時を決めるのは創造主ではなく被造物です。この見解に聖書的根拠は微塵もありません。

3. 最も一般的な偽りの選択肢

神は、式が行われたときにのみ結びつきが成立したと見なされる、という考えです。実際にはこれは第二の選択肢と大差ありません。違いは、人間の第三者(治安判事、登記官、司祭、牧師など)が過程に加わる点だけです。この選択肢でも、カップルは過去に複数の性的関係を持っていたよいことになっていますが、指導者の前に立った「今」になって、はじめて神が二つの魂の結合を認める、というのです。

婚宴における式の不在

聖書は四つの婚宴を記しますが、いずれの記述にも、結びつきを公式化したり祝福したりする式の言及はありません。神の前で結びつきが有効となるために、何らかの儀式や外的手続きが必要だ、と教える箇所はありません(創世記 29:21-28; 士師記 14:10-20; エステル記 2:18; ヨハネの福音書 2:1-11)。結びつきの確認は、処女が最初の男と合意のうえで性的関係を持ったとき(成就)に起こります。宗教的指導者や治安判事の前に立ったときにのみ神がふたりを結び合わせる、という考えは、聖書の支持を得ていません。

PDF: [聖書に記録されたすべての結婚を収録したPDFをダウンロード。](#)

姦淫と神の律法

初めから、神は姦淫——女が複数の男と関係を持つこと——を禁じられました。これは、女の魂は地上では一度にただひとりの男にしか結び合わされないからです。女が一生のうちに何人の男と結びつくかに上限はありませんが、新しい関係は、前の関係が死によって終わったときにしか起こりえません。なぜなら、そのときにのみ、男の魂はそれが来た神のもとへ帰るからです(伝道者の書 12:7)。言い換えれば、ほかの男と結びつくには、彼女はやもめでなければなりません。この真理は聖書の中で容易に確認できます。たとえば、王ダビデがナバルの死を聞いてはじめてアビガイルを迎え入れたとき(サムエル記上 25:39-40)、ボアズが夫マフロンを知っていたのでルツを妻として迎えたとき(ルツ記 4:13)、そしてユダが次男オナンに、死んだ兄の名によって子孫を起こすためタマルをめとるよう命じたとき(創世記 38:8)。参照: マタイの福音書 5:32; ローマ人への手紙 7:3。

男と女: 姦淫における違い

聖書において明らかに観察できるのは、女に対しての姦淫というものはなく、あるのは男に対しての姦淫だけだ、という点です。多くの教会が教える「男は女と別れて処女ややもめと結びつけば、元の妻に対して姦淫を犯すことになる」という考えは、聖書ではなく社会的慣習に根拠があります。

読む: [マルコ 10:11-12](#) と姦淫における偽りの平等。

このことの証拠は、主のしもべたちの多くが処女ややもめとの複数の結婚を経験しても、神がそれを咎められなかった数々の例に見られます——その中には四人の妻を持ち、そこからイスラエルの十二部族とメシアご自身が出たヤコブの例も含まれます。新しい妻を迎えるたびにヤコブが姦淫を犯した、とは一度も言われていません。

もうひとつよく知られた例は、ダビデの姦淫です。預言者ナタンは、ダビデがバテ・シェバと関係を持ったとき(サムエル記下 12:9)、王のいずれかの妻に対して姦淫があったとは何も言わず、ただ彼女の夫ウリヤに対しての姦淫だけを告げました。覚えておきたいのは、ダビデはすでにミカル、アビガイル、アヒノアムと結婚していたことです(サムエル記上 25:42)。つまり、姦淫は常に男に対してであって、女に対してではありません。

一部の指導者は、神はすべての事において男と女を同等にされると主張しがります。しかし、これは聖書の四千年にわたる記録に照らして観察されることとは一致しません。夫に対して姦淫を犯したとして男を神が戒められた、という例は、聖書に一つもありません。

読む: [なぜイエスは今日の一夫多妻をお許しにならないのか](#)。

これは、男が姦淫を犯さないという意味ではなく、神は男と女の姦淫を異なるものとして扱われるということです。刑罰そのものは両者にとって同じでした(レビ記 20:10; 申命記 22:22-24)。しかし、男の処女性と結婚には関連がありません。姦淫の有無を決定するのは男ではなく女です。聖書によれば、男は、処女でもやもめでもない女と関係を持つときはいつでも、姦淫を犯すのです。たとえば、25歳の処女(童貞)の男が、すでに別の男を持ったことのある23歳の女性と関係を持てば、彼は姦淫を犯すことになります。なぜなら、神の見方では、その若い女性は別の男の妻だからです(マタイの福音書 5:32; ローマ人への手紙 7:3; 民数記 5:12)。

レビラト婚と系譜の保持

この原則——女は最初の男の死後にのみ別の男と結びつける——は、家系の所有地を守るために与えられたレビラト婚の律法によっても確認されます。「兄弟たちがいっしょに住んでいて、そのうちの一人が子を残さずに死んだ場合、亡くなった者の妻は家族の外の他人に嫁いではない。彼女の夫の兄弟が彼女のところへ入り、彼女を妻としてめとり、兄弟の義務を果たさなければならない...」(申命記 25:5-10。参照：創世記 38:8；ルツ記 1:12-13；マタイの福音書 22:24)。なお、この律法は、義兄にすでに別の妻がいる場合でも果たされなければなりません。ボアズの例では、彼はまずルツをより近い親類に譲る申し出をしましたが、その男は、もう一人の妻を迎えて相続財産を分けることを望まず、辞退しました。「きょう、あなたがナオミの手から畑を買うその日に、死者の妻であるモアブの女ルツも買い受けて、その死人の名をその相続地の上に立てなければならない」(ルツ記 4:5)。

結婚に関する聖書的視点

聖書に示される結婚観は明確であり、現代の人間的慣習とは異なります。神は、男と処女またはやもめとのあいだの成就によって封印される霊的な結びつきとして結婚をお定めになり、式や司式者、外的儀式を必要とされません。

これは聖書が婚礼の式を禁じるという意味ではありませんが、それらが神の律法に従った魂の結びつきの成立要件でも確認手段でもないことは、明確にされるべきです。

結びつきが神の目に有効と見なされるのは、合意のある関係の瞬間だけです。これは、女は死がその結び目を解くまで、一度にただひとりの男にのみ結びつくという神の秩序を反映しています。聖書に描かれる婚宴に式が見当たらないことは、焦点が人間の形式ではなく、親密な契約と子孫継承という神の目的にあることを裏づけています。

結論

これらすべての聖書の記事と原則を踏まえると、神の結婚の定義は人間の伝統や法的形式ではなく、神ご自身の設計に根ざしていることが明らかになります。創造主は初めから基準を定められました。すなわち、男が、結婚する資格のある女——処女か、やもめである女——と合意の関係に入ったとき、結婚は神の御前で封印されるのです。民事または宗教の式は公の宣言として用いられることはあっても、神の前で結びつきが有効かどうかを決定する重みは持ちません。重要なのは、神の秩序への従順、婚姻の絆の神聖さへの敬意、そして文化の移り変わりや人の意見にかかわらず変わる事のない神の戒めへの忠実です。